

基準10．社会連携（教育研究上の資源、企業、地域社会等）

10-1 大学がもっている物的・人的資源を社会に提供する努力がなされていること。

《10-1の視点》

10-1- 大学施設の開放、公開講座、リフレッシュ教育など、大学がもっている物的・人的資源を社会に提供する努力がなされているか。

(1) 10-1の事実の説明（現状）

10-1- 大学施設の開放、公開講座、リフレッシュ教育など、大学がもっている物的・人的資源を社会に提供する努力がなされているか。

(1) 物的資源の社会提供

本学では、体育館、人工芝サッカー場、教場、ゲストハウス、大講堂の施設開放を行っている。主として、本学クラブ活動顧問と事務部署（入試広報室）が窓口となり、周辺中学・高等学校と連携を図りつつ「苫小牧駒澤大学施設貸与規程」に則り、クラブの練習・合宿活動及び学習・研修活動の会場として本学施設を開放している。施設使用状況は表 10-1-1 に示すとおりであり、平成 21 年には体育館 52 件、サッカー場 42 件、ゲストハウス 123 件、合計 217 件の施設を貸与した。

表 10-1-1．施設使用状況（過去 5 年間）

	体育館	サッカー場	教場	ゲストハウス	大講堂
平成 17 年度	39	-	11	105	4
平成 18 年度	37	62	17	177	4
平成 19 年度	27	41	4	164	5
平成 20 年度	39	59	19	145	6
平成 21 年度	52	42	29	123	5

（単位：件）

また、平成 20(2008)年には開学 10 周年記念事業として、駒澤大学教育後援会「駒澤会」の会員の御厚意により、8 月 2 日から 10 月 13 日まで、本学ミーティングルームにおいて「素顔の伊東深水」展を開催した。期間中は苫小牧市内外からも参観者が訪れ、延べ 3,370 人の方が来学されている（【資料編 10-3】参照）。

図書館・情報センターでは学外利用希望者に対し平成 10(2008)年の開学時から 5 年間は有料で開放していたが平成 16(2004)年度より申請のみで「図書館利用証」を発行し無償で閲覧及び貸出サービスを行っている。その結果、年間登録料を徴収していた時期に比べ学外登録者数は倍増した。過去 6 年間の学外登録者数と貸出冊数は表 10-1-2 のとおりである。

表 10-1-2 . 過去 6 年間の学外登録者数と貸出冊数

年度	苫小牧市内	その他	合計	貸出冊数
平成 16 年度	55	7	62	734
平成 17 年度	70	6	76	721
平成 18 年度	56	5	61	626
平成 19 年度	65	4	69	589
平成 20 年度	63	9	72	696
平成 21 年度	80	5	85	734

(2) 人的資源の社会提供

1. 聴講生・科目等履修制度

国際文化学部で開講する授業科目を社会人・市民に公開し、聴講生・科目等履修生制度を実施している。聴講生は平成 10(1998)年より、科目等履修生は平成 14(2002)年より受け入れている。その総数は、平成 21(2009)年度まで聴講生 731 名、科目等履修生 34 名であり年々増加傾向にある（【資料編 10-4】参照）。

2. 公開講座

地域社会に本学の持つ知的資源を還元する目的から、苫小牧市が主催する「とまこまい市民カレッジ」において「苫小牧駒澤大学講座」を設定し、毎年共通テーマを決めて市民向け講座を実施している。テーマ、講師は生涯学習・社会教育委員会で検討し決定している。受講定員は 40 名、受講料は 1,000 円程度の実費となっている。受講者はテーマや開催時期により変動があるが、50～70 代の会社員、退職者、主婦などが中心である。平成 21(2009)年度には、本学建学の精神に則り「仏教と人間《2》」をテーマに 1 講座計 4 回開催している。平成 22(2010)年度は市民の好評に応える形で、共通テーマ「仏教と人間《3》」を予定している（【資料編 10-5】参照）。

また、環太平洋・アイヌ文化研究所の主催により、アイヌ文化講座として、一般市民を対象とした「アイヌ語講座」と「アイヌ刺繍講座」が開講されている。詳細は、「特記事項 2. 環太平洋・アイヌ文化研究所」において説明する。

苫小牧市に所在し、地域の活性化を指針に積極的に活動している「NPO 法人ゆうべあまちづくりネットワーク」と連携し、「ゆうべあ市民大学・苫小牧駒澤大学連携講座」を開催する。平城京遷都 1300 年記念協賛事業として「現代社会に伝わる奈良時代の仏教文化と木簡から探る宮廷と庶民の生活」をテーマとして、9～10 月に計 5 講座を開催する他、苫小牧市の社会教育・生涯学習拠点となっているアイビープラザにおいて、10 月の 1 週間程度、平城京や木簡に関する展示と開設を中心とするパネル展を開催する予定である（【資料編 10-6】参照）。

3. 生涯教育

苫小牧市教育委員会が主催し市内最大の生涯学習団体である長生大学(学生数約 400 名) に例年講師を派遣し、講演を行っている。平成 22(2010)年度は、文学講座「御伽

草子を読む」(受講者約 120 名)を予定している。その他、長生大学との連携講座として、本学学内で講座を開催しており、平成 22(2010)年度は「北方史・アイヌ史」(受講者約 200 名)の講演を予定している(【資料編 10-7】参照)。

本学バドミントン部は毎年全国大会に出場し、昨年度は全国ベスト 16 に入るなど道内のバドミントン界を活性化させるうえでは、責任ある立場にある。平成 21(2009)年度には苫小牧地区バドミントン協会と連携し、バドミントン人口の拡大とレベルアップを目標として、小学生対象の練習会を開催した。当日は約 50 名の小学生が集まり、本学の学生が中心となり指導を行った。平成 22(2010)年度は夏と冬の 2 回の開催を予定している(【資料編 10-8】参照)。

4. 教員免許状更新講習

平成 21(2009)年 8 月 4 日～12 日に、本学専任教員を中心に必修講座(12 時間)の他、「考古学が開く新たなアイヌ史」「カイゼン活動にみる問題解決の手法を学ぶ」等、本学の特徴を生かした選択講座(7 講座各 6 時間)を設定した。全国的に大学主催の教員免許状更新講習が低調であった中、各講座ともに定員の 8 割以上を確保でき延べ 330 名の受講者が参加した。受講者の評価も高く、新聞でも好意的に報道されている(【資料編 10-9】参照)。

(2) 10-1の自己評価

聴講生・科目等履修生制度を利用し“学びの場”として市民が大学を活用することで、市民と大学の関係を築く点において大きな成果を上げている。また、苫小牧市と連携しつつ公開講座と市民の生涯教育に寄与していることも評価できる。平成 21 年度においては、教員免許状更新講習における地域貢献がとくに評価される。

課題としては公開講座の「仏教文化」への偏りである。本学の長を生かす意味では望ましいことではあるが、市民に開かれた大学として地域の教養文化の高揚も担保しなければならないため、多様なテーマを設定し展開していく必要がある。そのような意味からも NPO 法人との連携は評価できる。

図書館・情報センターは図書館を市民に開放することで地域社会への「知の還元」に努めている。

(3) 10-1の改善・向上方策(将来計画)

「とまこまい市民カレッジ」における本学の担当講座の多様化が必要である。専任教員 27 名の小規模大学では限界があるものの、本学が企画運営し、本学専任教員・非常勤講師のみならず、地域にある多様な人材を利用しつつ魅力ある講座を開設することが出来る。

長生大学のカリキュラムの中における本学の役割を確固たる物とし、地域における生涯学習拠点としての本学の役割を明確化させる。長生大学にはカリキュラムを終えた受講生のために研修科が存在し、地域の調査研究を主たる活動としている。この研修科の受講生の支援を通して、生涯学習拠点としての本学の存在意義が発揮できると考えられる。更に連携を深化させることによって、具体的な方策を立案していく。

また、NPO 法人との連携は、平成 22(2010)年度の記念事業に留まらず、恒常化した活動にできるよう働きかけ、公開講座のみならず多様な活動を展開する。

図書館に関しては、学生研究発表会、卒業論文発表会などの活動が契機となり、蔵書の利用も増加している。これを受けて、研究発表に関連した内容を館内展示のテーマと関連づけ、その相乗効果により、利用者の増員を計っていく。

10-2 教育研究上において、企業や他大学との適切な関係が構築されていること。

《10-2 の視点》

10-2- 教育研究上において、企業や他大学との適切な関係が構築されているか。

(1) 10-2 の事実の説明（現状）

10-2- 教育研究上において、企業や他大学との適切な関係が構築されているか。

(1) 企業との産学連携

平成 17(2005)年度に苫小牧信用金庫と産学連携の協定を締結している。事業内容は、本学が苫小牧市内中心部において開講する講座、文化・経済に関する講演会、セミナー及び民間団体等との協同研究、受託研究等である。事務部署（総務課・入試広報室）を窓口とし、事業計画を検討、実施している。協定締結後、社会人を対象に本学専任教員による「とましんサテライト教室」を平成 17(2005)年度に 4 講座(各 10 回)開講、前述した平成 20(2008)年度の絵画展開催時にご協力いただいた。

(2) インターンシップ

教育課程の一環として「インターンシップ」(2 単位)を 3 年次学生対象に実施しており、市内の企業約 20 社及び苫小牧市の協力のもと約 2 週間の企業研修を行っている。受け入れ側とは事前に打ち合わせを行い、日程の調整をするなどの連携をとりながら協力を得ている。学生自らが受け入れ先を開拓することも認めており、より学生の意向に沿った研修になるよう配慮している。研修終了後は報告会を開催し、教員や学生同士での意見交換を行うとともに、受け入れ先企業に対しては研修成果の報告を行っている。平成 21(2009)年度は 24 名の学生が受講している。

(3) 研究機関との連携

本学内に設置する環太平洋・アイヌ文化研究所は、平成 15(2003)年度に財団法人アイヌ民族博物館と学術・文化事業交流協定を締結している。アイヌ民族文化継承の 1 拠点として広くその文化を伝えること、アイヌ文化を学ぶ学生の活動を積極的に支援するため、各種行事の共催や共同研究の推進を図り交流を行っている。環太平洋・アイヌ文化研究所については「 . 特記事項」において詳しく説明する。

(2) 10-2の自己評価

企業・研究機関との協定に基づく事業に関しては、基本的な協力関係が構築されており教育的リソースの社会的還元がなされる体制が整っている。企業研修に関しては、

企業側の研修に対する理解と協力があり、大学の教育的観点から企業との良好な関係が保たれている。

(3) 10-2の改善・向上方策（将来計画）

「インターンシップ」を実施するにあたり、学生への十分な動機付けが重要である。目的意識を持った意欲ある学生を送り出すことで、企業の大学（学生）に対するイメージも良くなり、そこから信頼関係が生まれる。この積み重ねが学生の就職にも役立つ。「地元の大学から地元の企業へ」という流れが確立されれば、地域の活性化にも繋がる。本講座を介し、企業と大学との意見交換会を開催するなど、これまで以上の連携を図っていく。

企業との連携に関しては、現在、「情報ビジネスコース」の教員と学生を中心に苫小牧市商工会議所の協力を得て、新しい「まちづくり」に参画する事業を構想中である。

10-3 大学と地域社会との協力関係が構築されていること。

《10-3の視点》

10-3- 大学と地域社会との協力関係が構築されているか。

(1) 10-3の事実の説明（現状）

10-3- 大学と地域社会との協力関係が構築されているか。

本学では、平成16(2004)年度に社会教育・生涯学習委員会を設置し、「基準10-1、2」で述べたように苫小牧市との教育支援交流を図る取組みを行い、苫小牧信用金庫との産学連携協定、及び財団法人アイヌ民族博物館と学術・文化事業交流協定を締結し連携を図っている。その他、地域に開かれた生涯活動の拠点となるよう、以下のような活動を展開している。

(1) 地域小学校・中学校・高等学校との連携

苫小牧市内及び近隣自治体（胆振・日高地域）の中学生・高校生を対象に、英語力の向上を促進する目的で、本学事務部署（総務課）が窓口となり、苫小牧市の代表的な企業である王子製紙株式会社苫小牧工場の協賛の基、「英語弁論大会」を毎年11月に開催している。駒澤大学苫小牧短期大学時の開催に始まり、本学開設時に引き継ぎ大学行事として開催、今年度で通算44回目の実施となる。中学校・高等学校内では恒例行事として周知され、各学校の参加校も定着し、運営を本学英語担当教員と学生により行うことで学生と教員との交流の場になっている。

また、近隣小中高の学校へは、求めに応じて出前授業を行っており、とくに英語圏出身専任教員による出前授業は好評を得ている。

(2) 市内各行事への参加連携

本学では、苫小牧市内で開催される各種行事の参加依頼に対し、各事務部署への連携を円滑に行うことで、多くの学生及び教職員の参加を行っている。平成21(2009)年度の主な参加行事は次のとおりである。

「苫小牧市港まつり市民踊り参加」、「苫小牧市商店街行事へ留学生参加」、「とまこま

い北寄フェスタ学生ボランティア協力」、「ねんりんピック学生ボランティア協力」、「国際アイスホッケー日本文化体験プログラム実施協力」。その他、苫小牧市社会福祉協議会、市内小中学校の求めにより留学生を中心に国際交流行事に積極的に参与している。

また、苫小牧市の委員会である「苫小牧市環境基本計画推進会議」、「苫小牧港まつり常設委員会」、「苫小牧スケートまつり常設委員会」、「たるまえサンフェスティバル常設運営会議」の委員や「苫小牧市成人式」のボランティアとして学生を毎年参加させ、苫小牧市や市民との協力関係を築いている。

(3) 近隣自治体への協力

公的機関への教員委嘱に関し、業務に支障のない範囲での協力を実施している。

(2) 10-3の自己評価

地域社会への協力という点では、苫小牧市・苫小牧教育委員会との連携・協力のもと事業を実施し、研究機関との協定に基づく事業、施設の開放や聴講生等を積極的に受け入れている実績により、協力体制が構築され教育的リソースが社会へ還元されている。また、苫小牧市内開催各種行事への教職員・学生の参加協力する社会活動の場も年々広がってきている。

(3) 10-3の改善・向上方策（将来計画）

苫小牧市との連携・協力は定着している一方、近隣地域（胆振・日高地域）との連携はまだ十分ではない。地域の特色や文化を生かし、本学の教育的リソースを幅広く活用し、教育の発展及び地域活性化を図るよう、各自治体との構築を強化する。

また、英語教育だけでなく、中学校・高等学校へ出前授業や異文化交流など教育推進を図る提案を行う。

[基準 10 の自己評価]

図書館、体育館、教場などの施設開放を通じた物的資源の提供を通し、地域社会に貢献している。人的資源に関しては、教育委員会、地元企業、博物館、NPO法人と連携した公開講座やシンポジウム等の開催、地元行事に積極的に協力することで、地域社会のために大いに活かす努力をしている。

長い歴史を持つ「英語弁論大会」やスポーツ講座、出前授業等を通し、近隣の小中高の学校との間に、適切な関係を深めている。地域における英語教育への貢献はとくに評価できる。

[基準 10 の改善・向上方策（将来計画）]

地域の生涯学習拠点、文化センターとしての存在感を高めるために、本学の物的・人的資源の提供を発展的に継続する必要がある。

市の商工会議所と連携した「まちづくり」そして地元企業と連携した活動は、本学情報ビジネスコース所属の専任教員と学生により具体性を持たせる形で働きかけ、協力関係を深めていく。

苫小牧駒澤大学

公開講座や出前授業に関しては、市民、学校で求められているものを熟考しつつ、ニーズに応える形でプログラムのあり方を継続的に点検していく。